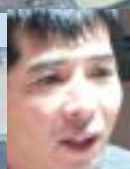


人に繋ぐ記録

「平成16年台風23号

水害を体験して」



「台風23号の記憶を風化させないために」
被災者の皆さんの体験談

先人たちから継ぐ願い、水害のない郷里に



■福知山市・石本地区

わく な お き

和久直樹さん

〈当時〉石本自治会長

農業を営む和久さんは、自宅が床上高くまで浸水し、作業場は2階まで浸水。家財と共に農機具や農具の多くを失いました。復旧できるか不安に陥った時、教員時代の教え子たちが駆けつけてくれました。その時のことを思うと今も目頭が熱くなります。

来ています。仏様と神様と掛け軸を持って2階に逃げるのが精一杯で、1階はあつという間に床上85センチまで浸かりました。その後、増水は午後11時半頃まで続きました。夜は水がひく頃合を見張るため寝ずの番です。先人の教えで、トイレと風呂場に堆積した泥は、水が引く時に洗わないと、

家は泥だらけ、家財はひっくり返り、建具は崩壊。作業場のトラクターや収穫物等も消失。このような農家が多くありました。復旧できるか不安に陥った時、教員時代の教え子たちが駆けつけてくれました。暗い、湿ったひどい環境の中で泥まみれになって助けてくれました。涙が出るほどうれしかったです。

業機械も避難する場所がありません。今回のように堤防が決壊すると孤立して救助もすぐには入って来られません。大変な苦しみです。もし、堤防が完成していたならこの悲惨な被害はなかったかもしれません。私はこの思いを陳情書にして国に伝えました。台風23号から2年後の今、堤防はほぼ完成するに至りました。これからも親孝行で郷里を愛する若者のために、より安全な村にしていきたいと思っています。



ました。台風23号から2年後の今、堤防はほぼ完成するに至りました。これからも親孝行で郷里を愛する若者のために、より安全な村にしていきたいと思っています。

昭和28年の台風13号で甚大な被害を受けた石本地区では、どんなことをしても水害をなくさねばと、堤防を築くために先人たちが身を切る思いで農地を手離しました。しかし、堤防は完成に至らず、暫定堤防のまま台風23号を迎えてしまいました。

いつもは雨の降り具合や川の増水状況を見て浸水の見当がつくのですが、この日は急激な増水でまったく予測不可能でした。夕方、激しい風雨の

中、堤防をはい上り牧川の水位を見ると猛烈な増水です。「これはえらいことになるぞ」と家に戻ると、市から避難勧告が出ていました。大急ぎで独居のご老人に避難を告げて回りました。しかし、一人の方は、道路が冠水して避難所まで行けないからと戻って来て、結局自宅の2階に避難しました。私も家に戻ると急いで車椅子の祖母を2階に避難させ、何から片付けようかと1階に下りると、水がもう玄関まで



後でするのは大変だからです。翌朝、水が引いた家を見ると無茶苦茶でした。

石本は盆地の中に山地があり、その周りに住居が散在しています。周囲は河川と田畑の低地で、人も車も高価な農

たいと思っています。

みんなのために、みんなでやる自主防災を



た。北からの

風がビュービュー

吹き荒れる雨

の中、冠水し

始めた道を歩

いて帰宅しま

した。

私の家は高

台にあり浸水

の恐れはまず

ありません。

午後7時半頃、

すぐ近くの郵

便局が浸かる

かもしれないと

家内と見に行

きました。見ると由良川の

水が堤防を越えてポストまで来

ています。このままでは郵便局が

浸かるので、家内に1階の荷物

を2階に上げるように指示し、

私は浸水の恐れのある区長の

家に向かいました。浸水しない

家は心安い家を手伝いに行く

のが昔からの常です。区長の家

に着くと畳を上げ、2階へ家財

■福知山市・勅使地区

しおみひろみ

塩見弘躬さん

勅使地区由良川改修促進委員

勅使樋門操作員



を片付け

る手伝い

をしました

た。それ

から地区

の住民の

被害を確

認して回

りました。避難所（勅使会館）に

は浸水した住民の他に、冠水し

た国道175号線から逃れてきた

ドライバーもいました。やがて

停電にもなりました。暫定堤防

を越えてきた水は、午後11時頃

をピークに落ち着き始めまし

た。やれやれと思い、家からス

トープを避難所に持ち寄り、イ

ンスタントラーメンなどを食

由良川が逆流しないように樋門を操作する塩見さん

んは、由良川と牧川の水位を見守るベテラン操作員

です。台風23号の時も、昼過ぎから樋門の詰め所に詰

めて、荒れ狂う川の水位を観察し記録していました。

べました。

翌朝、地区内は海のように

した。都会に住む友人にそのこ

とを話すと「そんな大きなこと

言わんときや」と笑って信じて

くれませんが、嘘ではありませ

ん。床上浸水の家屋13棟、作業

場9棟、床下浸水の家屋2棟、

倒木被害家屋2棟。午前中は市

役所からポンプ車が

来て、内水をポンプアッ

プして由良川に排水

しました。住民たち

は互いに助けのいる

家を訪ね、水に浸かつ

た家財や畳を運び出

したり、泥かきをし

たり、手伝いをして



回りました。そういう状態が1週間ぐらい続きました。数日後にはボランティアも来てくれました。

平成18年4月から「自主防災」を立ち上げました。第1回避難訓練には住民60人ほどが参加し、家から避難所までのぐら

い時間がかかるか計りました。

また、市の支援を

受け避難所に担架

や毛布などを備え

ました。みんなの

ために、みんな

でやる自主防災を、

風化させることな

く続けていきたい

と思っています。

午後2時頃、国土交通省からの連絡を受けて勅使樋門の点検に行き、そのまま詰め所に詰めていました。由良川が逆流しないように樋門を閉めたのはこの時分です。午後5時半頃、再び国土交通省から、由良川の増水がどこまで増えるかわからないので自宅に戻って待機するようにと指示がありまし

きました。見ると由良川の水が堤防を越えてポストまで来ています。このままでは郵便局が浸かるので、家内に1階の荷物を2階に上げるように指示し、私は浸水の恐れのある区長の家に向かいました。浸水しない家は心安い家を手伝いに行くのが昔からの常です。区長の家に着くと畳を上げ、2階へ家財

綿々とつながる、水害の歴史を振り返る



■福知山市・戸田地区
たなか さくじ
田中 作治さん

田中さんは戸田地区の大正生まれの長老です。長年にわたり度重なる水害と戦ってきました。また、区長や地区の要職を歴任し、良い町づくりに携わってきました。



ス等、そのほとんどが水没し、家財器具等もほとんど浸水という大被害を受けました。避難所へ行くにも、行く途中が約2メートル浸水のため行くことも出来ず、家も床上30センチ、納屋は1.2メートルの浸水で、近年にない大被害でした。

台風23号を機に、由良川改修に伴う移転事業が進み、地区約100戸中、約70戸の家屋が移転。また田畑の基盤整備、墓地の全面移転等々、どんどん変わりゆく戸田の歴史を後世に残していくことが大切と考えています。

政12年（1829年）に、大きな水害を受けたという記録はありますが、近年身を持って体験した水害は、何としても昭和28年の台風13号であります。戸田地区約100戸のすべてが床上浸水で、流失家屋も数軒あり、その中で、1軒、家屋の下敷きで1名死亡、同じ家のおばあさんが、家の流失と共に、流木にしがみつき、暗



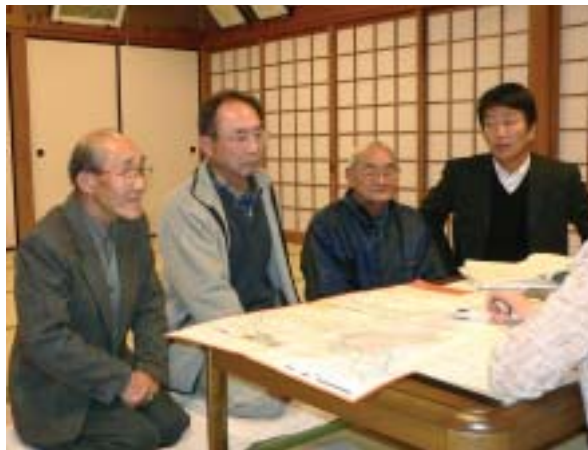
また、10月に水害が起こることは珍しいのですが、昭和20年終戦の年、10月9日に水害が起こりました。私たち農民の命とも言える田畑は、海軍の空軍基地となり、1800メートルの滑走路が造

られ、戦闘機が集結していましたが、戦後、航空機は国内の他の空軍基地に移動。周辺の山の空洞に隠していた航空燃料のガソリンが入ったドラム缶約200本他、軍用資材等が、占領軍の命令で、滑走路に集結させられ、米軍機2機を含め、全部流失したことなど、いろいろな水害を経験しました。最も近くは平成16年台風23号で、水害には慣れていると言いつつも、あまりにも出水が早く、家財、食料、米等を片付ける時間的余裕がなく、また農業機械、軽トラック、ハウ

このたび全国的に類を見ない由良川改修事業が進められ、それに伴い集団移転、基盤整備事業、総合開発事業が進められています。由良川周辺に住む私たちとしては、昔より度重なる水害で、人命財産を失いつつも、郷土を守り続けてきた先人たちの苦勞を偲びつつ、その水害の歴史の中で、1つ2つひもとき、永く後世に残したいと願っています。

享保20年（1735年）、文

子々孫々のために、水害のない町づくりを



これまでの経験から「まだ来るわけない」と避難しませんでした。避難所に避難したのは、土砂崩れにあった2家族7名だけでした。

由良川の水がガードレールを越えたのは午後10時頃です。国道沿いの避難所の1階はあつという間に浸水し、避難住民は2階へと逃れました。水足は今まで経験したことのない速さで、みんな動転しました。玄関を開けると一気に水が入り、何もできないうちに2階へ避難した人がほとんどです。車を高台へ移動して戻ったら家に水が来ていた人もいました。こうした被害状況を市や消防に知らせたいのですが、停電で電話が通じません。どこからも情

朝から川を見ながら、いつもとは違う降り方だなと思いつ、由良川の洪水情報や福知山水位の上昇状況を見ていました。午後2時過ぎ、増水が激しくなり「これは大変だ、水が国道を越えて来るに違いない」と、低地の住民に避難を呼びかけました。しかし、住民の多くはこ



た被害状況を市や消防に知らせたいのですが、停電で電話が通じません。どこからも情

■福知山市・下天津地区
かとう たまき

加藤 玉樹さん
下天津地区由良川改修対策委員

金山 一郎さん
〈当時〉下天津自治会長

岡井 敏治さん
〈現在〉下天津自治会長

中川 武さん
なかがわ たけし

報が入らず、まったくの孤立状態になりました。浸水した家の住民は皆2階に避難していて、暗闇の中で声を掛け合っ



て無事を確認し合いました。夜が明け、上流から流れてきたゴミと泥が堆積してひどい状況です。浸水しなかった家の住民を総動員して道や田畑に溜まった泥やゴミを片づけました。その量は膨大で、おおかた片付くのに12月までかかりました。下天津地区の被害は床

加藤さん、中川さんは床上浸水の被害にあわれました。下天津地区は由良川の中下流部に位置し、川幅が狭く、住居のすぐ前には川が、すぐ後ろには山が迫っています。浸水と土砂崩れと被害は多発的で、今後の具体的な治水対策の必要性を痛感しています。

上浸水が30棟、床下浸水が24棟、崖崩れ被害が4棟、崖崩れ、土石流は10カ所以上に上ります。住民の多くは農業に携わっているのですが、農道、農業用水路の損壊、田畑の冠水、積泥がひどく、次期の稲作に大きな不安を残しました。



由良川流域では築堤・輪中堤の工事、集団移転などの治水事業が進んでいます。下天津地区はまだ改善対策案が



ありません。上流の整備が進むにつれ下流の水足は速くなり、被害はさらに大きくなるのではと不安です。昭和28年の台風13号以来、水害のない町にすることが住民みんなの悲願です。このまま何もしなければ子々孫々に申し訳なく思います。安心して暮らせる町を作るためなら、いかなる計画案でも協力し合おうという固い決意で由良川改修対策に取り組んでいます。

その時だけやるのでは、本当の自主防災ではない



■ 福知山市・土地区
たなか みのる

田中 稔さん

〈当時〉 財産区組合長
〈現在〉 土自治会長

田中さんの家は高台にあり浸水の被害は受けませんでした。しかし、地区の被害は自分の被害。長年務めた消防団としての意識が働き、台風時の対応からごみの片付け等々、住民を先導して町の復旧に力を注ぎました。

昼から雨が激しくなり、今までにないほど降っていたので、こんな雨はおかしいなと思って大谷川を見に行きました。すると川はもういっぱい、さらに先のカケト橋まで行くとすぐに水が上がり、来ていました。ここは福知山市のサイレンが鳴る1時間前に水が上がる所です。道は冠水し車が入って来たら危険なので第2消防を呼び、道を封鎖した

のが午後2時頃。周囲には農家が多く、農機具が水に浸かるとためになるので放送で呼びかけました。午後4時頃も消防団に広報車を出してもらい、水がそこまで来ていることを告げて回りました。住民は長い間大きな水害がなかったの、「そんな早く来ないやろ」と、本気で避難しませんでした。しかし、あつという間に増水し、何もできぬまま浸水にあった



住民が多く出ました。手の施しようがないというのはこういうことを言うのだと思いました。午後5時頃には、消防団の和船で孤立した民家の救助に向かいましたが、パーツと流れ込んできた角材に阻まれ進むことができませんでした。台風23号は北からの暴風で、この一帯は湾のようになり、さまざまな物の吹き溜まりになりました。ありとあらゆる

物が住居の道まで流れ込み、その惨状は新聞やテレビにも随分報道されました。

夜は避難所に炊き出しのおにぎりなどを持って行きました。

午前3時頃に水が引



ていました。

き、住民が帰ろうとしたので、道のごみを片付けようと呼びかけました。残る者はいませんでした。それで一人でトラックを使い片付けましたが、とてもできる量ではなく一旦帰宅し、午前5時に再び作業を始めました。道を開けなければ皆の復旧ができないと思っただからです。そうこうしてい

最近は何でも個人でやろうという風潮にあります。しかし、災害時に一番大切なのは助け合う気持ちです。台風23号を機に「土自主防災」を立ち上げました。その時だけでなく、平日頃から何かにつけて協力し合う気持ち、本当の自主防災になると信じています。

人と人のつながりが、災害時には大きな力に



■旧大江町・河守上地区
さわらぎ たつお
榎木 辰雄さん

台風時の停電で電話が使えなくなったことから、携帯電話の充電は欠かさないという榎木さん。家を改修した時も浸水に備えてコンセントの位置を高い所に設置しました。生活の細かなことにも水害からの教訓を活かしています。

んなに急激に増水するとは思いませんでした。午後4時頃には車を高台に避難させ、勤めている娘に浸水の危険を伝え、早く帰宅を指示しましたが、時すでに遅く、家の近くまでは来ましたが、浸水や倒木で家には帰れず、兄宅に向かうも与謝峠の崩落で、結局福知山の友人宅にお世話になりました。



ごと流されてもこれも運命と開き直り、2階で一夜を過ごそうと決心しました。水が引き始めましたが、役場の放送はこれからも増水するとのことでした。しかし、その後の増水はなく、床上36センチが最高でした。

翌朝、夜明けと共に外を見ると、表に置いていた小型の冷蔵庫などが流され、府道にはおびただしい量の根こそぎの大木やごみが散乱していま



夜明けより早く福知山を出た娘は午前11時前に、京丹後市を出た息子もようやく午後4時頃に家にたどり着くことができました。また、連日多くの近所の人や知人、親戚の手助けで、思ったより早く一応の片付けが出来ました。

人の助けのありがたさ、人と人のつながりの大切さが身にしみました。日頃からのつきあいがあつて、互いのことを思いやれる、そんな人間関係が災害時に大きな力になります。これからもういう人間関係を大事に育んでいきたいと思っています。

この辺りはめったに浸水することがない所で、大水害をもたらしたのは雲原川の堤防決壊で、台風時にはその情報があったくなく混乱しました。雲原川の情報があればとつくづく思いました。

前日の雨は昼から一段とひどくなりましたが、誰もがあ

私は重要な物から2階や机上に運び始めましたが、水はますます勢いを増し、床上に流れ込んできました。一人で居るのも不安で、避難所の公民館に行こうと勝手口の戸を開けると激流が目飛び込み、身の危険を感じ、戸を閉め、「家

何よりも命が大事、無駄と思っても逃げることに



と音がして、ふと見たら土間で水が入って来ています。食事を放り出し、家財を

最初はそんなに降ると思わなかったで、午前中は出かけていました。昼頃、家に戻ると息子夫婦と孫夫婦が来てくれていました。私は家族のおかげで助かったと思っています。

その日、みんなで昼食をとっている時も「少しずつ片付けたらいいわ」と思っていました。有線放送で水位情報も確かめていました。それが午後7時頃、ころっと変わったのです。「大したことはないね」と言いながら夕飯を食べていたらゴーゴー

2階へ片付けようと思ったら量がふかふか浮き出して、位牌と神棚を上げるのがやっと。堤防が切れたと思うほどの早さで、何もできず2階に逃れました。水は増え続け、風はビュービューと唸り、役場の情報も途絶え、停電になり真っ暗です。2階も浸水するかもと、息子たちが家財を3階へ上げてくれました。午後9時頃、とうとう2階に水が来ました。助けを求めるにもこの辺一帯は湖で、誰も来てくれません。それでも「たすけてー、たすけてー」

■旧大江町・河守地区

きぬかわ ふみえ

絹川 富美江さん

この土地に嫁いで60年になる絹川さんは、ご主人に先立たれ一人で暮らしています。昔ながらの家屋には水害時に荷物を上の階に上げるカタという滑車があります。また、壁や柱には「ご主人が記された浸水のかさを示す印と日付が残っています。」

と窓から叫びました。その時たまたま消防団の船が通りかかり、これで避難できると思いました。でも、この時が一番恐かったのです。屋根づたいに船に乗るのですが、横殴りの風雨に足元は不安定、水は激流で落ちたら終わりです。何とか全員乗り込むと、今度は重量オーバーで船が沈みかけました。孫が慌てて降り「後から行く」と2階へ戻りました。船は10歩ほど先の高台の家を目指すのですが、底なしの泥水で舵がとれずなかなか進み



ません。何度もバランスを崩しその度に「仏さん、仏さん」と拝みました。船に溜まった水を捨てながら10分以上かけて辿り着きました。生きた心地はしませんでした。今思ってもぞつとします。

翌日は午前11時頃、長靴で歩けるぐらいの水位になりました。家に戻ると何もかもひっくり返って足の踏み場もありません。呆然としてみると、屋から親類らが駆けつけてくれ、片付けを始めてくれました。それから1週間あまり、毎日



入れ代わり立ち代り大勢のボランティアさんにお世話になり、一生懸命片付けてくださる様子に、涙が出るほどありがたううれしかったです。嫁いで60年、家財を水に浸けたことはありませんでした。こんなひどい目は二度とご免です。それでも家財より命が大事。台風時はたとえ避難が無駄になっても、避難袋を持って避難所へ行く決めていきます。

いかに早く我にかえるか、その大切さを知る



が川のように、流木が店のガラスに当たり大きな音をたてて割れました。水が一気に流れ込み、あつという間に腰までつか

■旧大江町・河西地区
さこだ あつし
迫田 厚さん
〈当時〉 夢原区長

迫田さんは区長として、台風時からその後の町の復旧まで、地区のあちこちを奔走しました。問題があればそこへ行き、どんなことにも対処しました。その時の出来事をつぶさに記したノートがあります。それはこの大水害で起きた出来事と自分を失わなかったための手記でした。

善される状況に、目隠しされて見えなかったことが見えなくなりました。



午後4時頃、消防団員や町の役員を招集する3号動員の放送が入り、災害対策支部に行きました。夕刻まで鉄砲水などの被害状況確認に当たり、それからそれぞれの家も危ないのではと、家に戻ったのが6時半頃です。

りました。パソコンと帳簿だけは何とか持つて上がりましたが、他はすべてあきらめ2階へ避難しました。階段を覗いて増水具合を見ていると7時過ぎに停電してしまいました。その後は濁流のゴオーツという不気味な音と、ミシミシガッシャーという何かが迫ってくるような音の世界。暗闇に取り残された気分です。増水は午前1時頃止まりましたが、1階はほぼ天井まで浸かりました。

夜明けと共に水が引き始め、階下に取り残された私は、それからパニックでした。店は何もかも滅茶苦茶です。ただ呆然と水が引くのを見ているだけでした。ようやく表に出られるようになり、見渡すと道路には30センチ以上の泥が堆積。町は壊滅状態です。

その日から毎日の出来事をノートに記しました。書き留めなければ忘れてしまうと思ったからです。朝は地区役員さん集合してもらい、町から支給された弁当を各家庭に配る準備をし、その後、問題点を確認。昼は地区の状況把握に歩き回り、午後6時頃からは災害対策支部に6区長が集まり、



各地区の問題点を話し合い、行政に善後策をお願いするといった事態が1週間ほど続きました。そんな中、夜寝る前に反省点、問題点をノートにつけて考えました。何をしたら。何をすべきか。復旧が日毎に進み、道

がよくなると自転車で被害状況の確認に走り回りました。ボランティアの方もたくさん来られ、独居老人宅、老夫婦宅を汗と泥にまみれ、自分の家のように一生懸命に被害回復に活躍していたとき、人のあたたかみを感じ、感謝の一言です。

子供らの助け合う気持ちに、感動と勇気をもろう



ご飯の用意と洗濯をして、2人の息子には、畳上げや高い所への荷物の移動など力仕事をやってもらいました。午後6時頃、自転車家をいれようと玄関の扉を開けるとザーツと水が入り、30分で1メートルほど上がりました。

ご主人 その頃、私は地区の住民の避難誘導をしていました。歩けないご老人をおぶって高台の家に避難させたり、浸水

しそうな家の畳を上げるのを手伝ったり。そうこうしているうちに浸水が始まりました。支部のある建物も浸水し、別の場所へ移動したのですが、それからはもう身動きがとれなくなっていました。

奥様 家も水に浸かり始め、停電になり「もう逃げられない」と思い、息子と私と犬と2階へ避難しました。消防団の方が救助に来てくれた時は、階段の半

ご主人 3号動員の発令がかり、店から一旦帰宅し、災害対策支部へ行きました。今晩は長引くだろうからと、福知山市まで食料の買出しに行ったのですが、帰りの道で道路が冠水してしまい、途中で軽トラックを乗り捨てて荷物を抱えて支部に戻りました。

奥様 私は午後4時頃に仕事から帰宅しました。停電になったら何もできなくなるので、

■旧大江町・河東地区
福知山市消防団河東分団

多田 富士男さん

智 子さん

ご夫妻



分まで水が来ていました。私は消防団の人に抱き上げら

れて表に出ると、ご近所の方が「迎えに来たで」と来てくれていて、あたたかな一言に緊張がほぐれ心の底からほっとしました。息子たちとは別の家に避難しましたが、電気の灯つたあたたかな家で一晩過ごせ、ご近所の方のやさしさが身にしみてありがたかったです。

ご主人 私の方は家族の無事を知り安心しましたが、父母のいる店とは連絡がとれなくなり心配でした。店は田畑

ご両親と店を営むご主人が消防団員として避難誘導などの活動をしている間、家を守る奥さんは家屋が浸水し、他の消防団員に救助されました。こういう事態は消防団の家族にはいたしかたのないこと。家屋は大きな被害を受けましたが、たくさんの人々に支えられ乗り切りました。

に囲まれた道路沿いに1軒だけ、水の流れがきつい所にあります。翌朝、地元の消防団が無事を確認してくれ安堵しましたが、店は床上1メートル30センチ、家は床上2メートル80センチ浸水。片付けるのに本当にたくさんの人に助けていただき、感謝の一言につきます。

奥様 私が一番感動したのは、息子の友だちが長靴を履いて来てくれて、息子のことを「どうや？」って聞いてくれて「僕らにも何か手伝わせて」と言ってくれたことです。沈みがちだった息子も友



れほどうれしく思えたことはありませんでした。命が助かっただけでありがたいと思っています。

だちと話して元気が出ました。子供らが助け合う気持ちです。息子もその後、何か手伝いたいとボランティアに出ました。「おかん、頑張れ」って言うってくれて、息子も頑張っているのだから私も頑張らなきゃと勇気づけられました。

ご主人 教訓はいろいろありますが、ご老人、子供、みんなの安全確保、これにつきます。

生きる気力をくれたボランティアに感謝



■旧大江町・有路上地区
はた みつお

畑 光男さん

〈当時〉 大江町北有路
北二小区長代理

畑さんは昭和57年にこの地に来て「そば処」を始めました。店は台風23号で大打撃を受け、地元の人たちには閉店するのではと思われたほどでした。しかし、平成17年1月15日に再オープン。こだわりの佇まいが蘇りました。

宅に避難させてもらいました。夜は凄まじい風が吹き荒れ、一睡もできませんでした。翌朝、公会堂へ行く



と床上浸水1メートルほどで扉は壊れ、家財がひっくり返っていました。ある程度水が引き

れました。着替えや車をいただいたり、土を運び入れてもらったり。途方に暮れていた私には生きる気力をくれました。次男は新潟で地震が起きた時、ボランティアに行きたいと言いました。感謝の思いは言葉では尽くせません。台風23号で一番思ったのは、早く逃げ

通常の台風は裏の竹藪から吹く南西の風ですが、台風23号は南東からの風でした。下から吹き上げてくる風で、こんな風は初めてでした。店の裏には40センチの石を積んだ石垣があり、40センチを何分で増水するか一つの目安にしています。まだ大丈夫と思っていた時、長男夫婦が来て、入ってくるなり「何しとんか!」と言いました。道路が冠水して

いると言われても信じられませんでした。それから家族7人、取る物も取りあえず車に乗り、避難所の公会堂へ行きました。道路は50センチほど冠水しています。公会堂へ着いた時はまだ明るく、安堵して外を見ると、前の道まで水が来ています。裏山では水が流れ出し、かさは10センチもないのに歩けないほどの勢いです。危機感が増し、さらに高台の知人

空では自衛隊のヘリコプターが何度も旋回しています。店の付近まで帰って来たのは午前10時前後、まだ膝上ほどの水位がありました。遠めに見ると、屋根の一部が落ちて

ドアもサッシも家財も消失。駐車場のアスファルトは砕け、家の土台の土はごっそりえぐられ流されていました。断水で水がなく、土台から外れた浴槽に溜まった泥水が手洗いの水です。水の害にあったのに水に事欠く始末です。友人知人を含め延べ200人ぐ

らいのボランティアが来てくれたら逃げ遅れていたかもしれません。命がなければ今はありません。



昔からの水害常襲地帯、助け合いが一番大事



■旧大江町・有路下地区

ましも たもつ

真下 保さん

〈当時〉 岡組長

スクールバスの運転手をしている真下さんは、20日の午前中、授業が中止になった小学生たちを家まで送り届けました。長年付けている水位の記録ノートには、有線放送やTVニュースの情報がびっしり。由良川と共に生きているノートです。

軽トラックで上の方の家にも異常を伝えに行きましたが、道は川のように、杉や松の木が倒れている所もありました。恐ろしいほど風が

中電灯を頼りに家財や米を大急ぎで2階に上げました。それはもう火事場のばか力という感じで必死でした。その後

て歩きました。水害常襲地帯なので昔から助け合うのが当たり前。

災害時には助け合いが一番大事です。しかし、最近が高齢者だけの所帯が増え、河川の改修や気象の変化で雨の降り方も変わってきています。私は何年も水位情報などをノートに記し、独自の方法で対処してきましたが、台風23号は予測不能でした。またこんな台風が来たら、今までのようにはいかぬかと思っています。

吹き、身の危険を感じました。あんなきつい風を経験したのは生まれて初めてでした。



いかに不安で見張っていましたが、後日屋根に並べた乾かししました。この辺りは2階から1メートル以上も水が上がった家は何軒かあります。どの家も暴風で窓を締め切っていたため外の様子に気づくのに遅れ、被害が大きくなりました。21日はご近所の片付けを手伝い、炊き出しのおにぎりを配っ

午前11時頃、小学生の生徒たちをスクールバスで送り届けて、家に帰って来ました。その時は雨だけでしたが、昼ご飯を食べていると猛烈に風が吹き始めました。ポトポトと音がするので何だろうと隣の部屋をのぞくと、瓦屋根の隙間から雨が入り畳に落ちています。急いで鍋や鉢、バケツで雨を受け止めたがひどくなるばかり。どうしようもないので天井裏に上がり、古

いシャツなどを入れた発泡スチロールの箱で雨漏りを防ぎました。それに時間をとられ、ふと家の近くの橋を見ると驚くほど増水しています。「下に

ある店が危ない」とご近所の店の手伝いに走りました。途中の道の三叉路が冠水していて、ドライバーが立ち往生していました。助けたくともなすすべはなく、その人には次の日の夕方まで私の家に避難してもらいました。それから

家に戻ると家財を高い所へ上げ、収穫したばかりの米40袋も1階の少し高い部屋に上げました。夜は停電になり、電話は使えず、町の有線放送も入らず、情報が一切分かりません。午後9時に家が水に浸かり始め、懐

時代にあった組織作りで防災ネットワークを



■舞鶴市・志高地区
たむかいてるゆき

田向輝行さん

〈当時〉 志高区長
〈現在〉 志高区
水防災推進委員長

いる時に1本の電話が入りました。私の家よりも低い所に3軒の家が並んでいるのですが、その内の1軒に住んでいる組長から

の電話です。彼は道路が冠水して家に帰れず、家で奥さんと子供が深刻な浸水状態にあるので助けて欲しいと言ってきました。とにかく自力で何とかするしかなく、まず舞鶴市の消防本部へ救助要請するも、夜間で暴風のためいつになるか分からないとの返事。段々とパニック状態は増し、市の消防署から配備されて

いる木造の救助舟の出勤を、格納庫近くの組長に要請しました。しかし、居ても立って



かなが帰って来ません。待っている間、要請した救助舟から「風が強くて進めないなので引き返す」と携帯電話に

電気店を営む田向さんは台風時から復旧まで、甚大な被害を受けた住民のために奔走しました。情報伝達、ごみ処理問題、炊き出し、被災者への援助など、さまざまな問題を行政と話し合い、対策を講じてきました

連絡が入りました。舟はまだ戻らず、もしやと不安が募りました。ようやく戻って来たと思っ



カセットボンベで沸かしたお茶とコーヒールで一夜を過ごしました。もし明るいうちに避難勧告が出てい

たら、毛布に包まれた2カ月の赤ん坊と母親、看護婦の祖母が乗っていました。窓からの救出で時間がかかったとのことでした。最後に組長の奥さんと息子と犬が救出されました。小谷さんの活躍に感謝状をあげたい気持ちでいっぱいでした。救出された人は着の身着のままの姿で雨に濡れ、寒さと恐怖で震えていたので、我が家の応接間で、暗闇の中で、着替えや毛布を渡し、暖を取り、

今、水防災推進委員長を務める傍ら、水害常襲地帯であるこの地区で防災の組織作りをしなればと活動しています。防災無線も有線放送に連動させ、究極は無線だと思ひますので、アマチュア無線を有効活用し、コミュニケーションをとりながら共に助け合い災害に対処する、そんなネットワーク作りができればと思っています。

20日は区長事務所にいましたが、暴風雨でとくに風が強く、吹き飛ばされそうなほどの勢いでした。テレビもラジオもなぐ何の情報も入らず、由良川がどれだけ増水するかも分かりませんでした。それよりも谷川の増水がひどく、自主避難をする人のために公民館を開放し、何とか帰路に着きましたが、それだけでパニックになりそうでした。日が暮れて停電になりましたが、幸いホームテレホンは使えました。

どうする術もなく困惑して

今後に備えて1日も早く輪中堤の完成を



に浸かりながら避難されて来ました。その内の1名は、抱えて来たパソコンを私に手渡し、もう1台のパソコンを車に取りに行くといいましたが、危険なので必死に止めましたが、

店は営業していましたが、雨がひどくなり、片付けようと思ったのが午後2時半頃。しかし、お客さんが一人来られ、結局3時半頃に片付けを始めました。由良川の水位が後1メートル上昇すれば、もう国道に水が来るという状態で、車を避難させ、店の細々とした物と理容椅子2台を2階に上げました。その間に国道が冠水。立ち往生したドライバーが3名、助けを求めて来られました。それが午後6時半頃でしょうか。さらに4名のドライバーが、腰まで水

結局、取りに行かれました。その後、避難者の方に2階に避難してもらい、着替えなどを渡しました。

私は昭和47年に浸水した経験がありますが、妻は初めてで、どこまで水が上がるか、家が流されるのではないかと恐怖を感じていました。水の流れる風の勢いもすごく、北風が突風のごとく吹きつけ、耳鳴りのような音がして、家が船に乗っているように揺れているのを感じました。避難して来た人の表情はさまざまで、お腹もすぐ

■舞鶴市・志高地区

こたに ひろふみ

小谷博文さん



だろうとパンやごはんを出しました。

最後の避難者が来たのは

午後8時頃だったと思います。2名の消防士が2名を救助して来られました。肩まで水に浸かりながらの避難です。しかし、別の消防士1名とバスの運転手1名が数メートル先に取り残され、木につかまって一晩過ごすことになりました。家は2階も水に浸かりそうになり、家族と避難者合計17名で3階へ避難しました。消防士2名は2

国道175号線沿いで理容員を営む小谷さんは、この地区で一番低い所に住んでいます。1階が店と駐車場で、2階と3階に住居のある建物には、荷物を上げるためのエレベーターを設置しています。しかし、2階は床上30センチまで浸水し大きな被害を受けました。

階の玄関先に残り、ずっと外の2名に指示を出し、声をかけていました。私は舞鶴市の対策本部と消防士との連絡係りとなり、ケータイでやりとりしていましたが、そのケータイも午前1時頃に電波が届かなくなりました。午前5時頃、再びケータイが鳴り、対策本部から午前6時にヘリコプターの救助が来ると言ってきました。6時前、ヘリが10機ほど来たので、随分多いなあと思います



した。水没バスはこの時初めて知りました。消防士も無事救助されました。水が引き出したので、私は家と店の泥を流す作業に取りかかりました。家も店もひどい状況です。午後、すっかり水が引くと避難者も帰って行かれました。雨風や台風が来る時の覚悟はいつも出ています。しかし、以前は福知山が最高水位に達した6時間後に志高が最高水位に達していましたが、最近では水量がまちまちで予測できません。今、この地区では輪中堤の計画が進んでいますが、1日も早く完成して欲しいと願っています。

歳月が経ち新しい家に桜を植えて

ました。

■ご主人 西方寺峠の下

の家に車を置き、同じ地区の人と一緒に山中を歩き、谷水が溢れている所を夢中になって通り、途中市道に下りると道路が陥落。再び山越えで歩き、滝ヶ宇呂の一番下の家に着いたのが午後6時頃です。



奥様 その頃、店では

浸水するか心配で、様子を見に出ようとしたら、水が前の国道まで来ていました。まさか2階まで浸かるまいと、引き出しや荷物を上の家の軒先に2、3回持ち運んでいるとドッドツと水が入って来て、畳が浮き、冷蔵庫もひっくり返り、もうだめだと思ひ避難所へ行きました。でも、そこも浸かりそうになり、別の家へ移動しました。

ご主人 懐中電灯を手に、家に続く道の手前に架かっている橋まで行きました。しかし、

奥様 午後4時過ぎ、家にいる母から店に電話があり「どんな私の部屋に木が当たる」と言われました。家は大丈夫と思っていたので、どこの木が当たるとかと思ひ、主人と帰ることにしました。ところが、どの道も冠水で帰れそうになく、結局、主人は山越えで帰ることに決めた、私は店に送り返してもらい

■舞鶴市・滝ヶ宇呂地区
こんどう いっ お

近藤 惟之男さん

近藤 幸代さん

ご夫妻



みが絡みつき、商品は滅茶苦茶にひっくり返っていました。その日は何もできませんでした。

ご主人 警察の方々に

て行きましたが、橋の先は濁流で道路が流出。また山に登り家が見える所へ下りました。見えなければならぬはずの家の屋根が見えませんでした。

奥様 一睡もできず、午前9

時頃、主人から電話があり「家が壊れ、母の姿が見えない」と言われ、元警察官の方が「警察へ搜索を頼むから」とすぐ連絡してくださいました。午前11時頃、水が引き店へ戻ると藁やご

近藤さんご夫妻は志高で店を営まれ、自宅は滝ヶ宇呂の山中にあります。自宅は土砂崩れにあい、お母さんが犠牲になりました。新しく建て替えられた家に戻られたのは台風から1年後の秋でした。

その後は、店の片付け、日曜日は仮の住まいから自宅に行き、出来ることを少しずつやりました。5月の末に建前が出来、10月末に完成。母の1周忌を行うことが出来ました。京都府や舞鶴市など大勢の方の励みや援助により復旧することが出来ました。

2年余りの月日が経ち、荒れた時は何もいなかった川に、以前からいた魚がいます。土留め工事の場所に桜の苗木を植えました。



土砂崩れが起きないようしっかりと根を張ってくださるように願ひながら。

災害の記録で記憶を新たにしたい



■舞鶴市・下見谷地区
やました たいち

山下 太一さん

「台風23号災害記録写真集」
写真集編集委員会編集長
下見谷区災害復旧対策委員会
委員長

山下さんは「台風23号災害記録写真集」の編集長として、自らも写真を撮り、災害の記録を克明に残しました。復興においては災害復旧対策委員会委員長として、現在も河川改修、治山ダム、ほ場整備に懸命に取り組んでいます。

ちは従来から家庭を守るという愛着心が強く、今まで避難することはなかったのですが、私の場合は、明治40年8月の大洪水で、裏山の土砂崩れにより家が半壊したことを

母親から常に聞かされていたので避難しました。

20日の朝、町へ買い物に出かけた時は、風雨はそれほど強くなく、家に戻り昼食をすませた頃、テレビはまだ四国の沖合いに台風の中心と報じていました。しかし、急に本格的な暴風雨の様相を呈し、午後2時半頃、家の下の河川が急に増水し始め、橋桁まで30センチに迫り危険を感じ、家内と2人で集会所へ軽トラックで避難することにしました。

時間が経つにつれ暴風雨は強烈を極め、山は唸り、濁流は谷から滝のように流れ落ちました。これは異常事態と思い、車で巡回しましたが、午後5時頃、すでに市道は冠水と土砂崩れで通行不能。夜は停電のため懐中電灯で過ごしました。まだ電話だけは通じて、上流に住んでいる方より避難したいと連絡がありました。が、道が通れないと返事しました。一番の猛威を感じたのは午後

5時頃から7時頃、だったと思います。

午後11時頃、雨風がおさまったので、家の方が心配になり、歩いて帰ることにしました。竹やぶの地すべりで道路が通れず、難儀して家の下の作業場へ着くも、家の前の橋は流れて通れず、ストロブで暖をとり作業場で朝まで過ごしました。一睡もせず、夜が明けて見た光景は、今まで経験したことのない哀れな惨憺たるもので、ただ呆然と眺めるばかりでした。

台風一過、下見谷区長はただちに総集會を



開催し、私は下見谷復旧対策委員長として区民の総意で指名され、誠心誠意復旧促進に努力いたしました。被害は甚大で22戸のうち15戸が土砂、流木堆積浸水の被害にあいました。また、地すべりで家屋が全壊しご夫婦が犠牲になりました。誠に残念で言葉がありません。



に至り、また治水ダム、田畑の田圃整備等も近く完成するに至ります。各関係機関のご高配ご支援に対し深甚の敬意と感謝の念でいっぱいです。

また、災害が発生するやボランティアの方々に大変お世話になりました。このご恩は決して忘れることはありません。本当にありがたううれしかったです。私は当地の災害復興が完成した暁には資料を克明に記録し、整備し、岡田中基幹集落センターに保存し、後世に伝えたいと願っております。

復旧については舞鶴市長をはじめ国・府・市各関係機関に陳情し、迅速かつ確実な復旧計画が立案されました。2年余の短期間で、河川の整備はほぼ完成

もしもの時に備えて家庭用のボートを



た。風速53

メートル

の突風が

5時30分

頃に吹い

たとのこと

多分その

時間であつ

たと思ひ

ます。それ

からが大

変でした。

旅行に出ていて19日に帰つ

て来ましたが、雨はそれほど降つ

ていなかったと思います。20

日は昼から雨で、最初はそん

なひどくなると思ひませんで

したが、大雨になり、ものすご

い風も吹きました。午後5時頃、

ビニールハウスにエンジンをつ

2台置いていたので、家内と

2人で取りに行きましたが、

手ぶらで帰りました。南風が

農道に対して直角に吹き、こ

うようにして行つたのですが、

とても持つて帰れませんでした

雨風で濡れ、ストープに当たつ

ていて、ふと外を見ると田圃

が光っています。奥谷から流

れてくる水かと思ひ、よく見

ると田圃全体が光り、すでに

浸水しています。それが午後

9時頃。急いで作業場を片付け、

離れを片付け、家を片付けま

した。めったに水に浸けたこ

とはないので、水足が速

くて作業場は2階まで沈みま

した。2階に上げた米をはじ

めトラクター、コンバイン、糊

の乾燥機、トラックや車、石灰

■舞鶴市・三日市地区

ありもと まさし

有本 正司さん

有本さんは奥様と2人で広い田畑を耕し米作りやハウス栽培をしています。自宅前を通る1本の生活道路を挟んで田畑、作業場があり、田畑の向こうに由良川が流れています。台風23号で失った農機具、重機は八雲地区で一番の損害となりました。

窒素の肥料も浸かり、杭やタ

ンクなどはほとんど流されま

した。助かったのは小さい米

搗き機だけです。ビニールハ

ウスも突風に煽られ、ひつこ

り返っていました。堤防を越

えて来た水は1時間に1メー

トル20センチは上がったと思

います。水が引き出したのは

午前3時頃。家の浸水は床上

5センチでしたが、炊事場が

どろどろでした。明け

方からヘリコプターが

何回も飛んでいました

が、3日ほど停電して

いたので情報が入らず、

新聞が来ては初めて水

没したバスの乗客の救



いたとき大変ありがたかつ

たです。

台風23号では、昔の半

分の時間の速さで水が

来て、道路も通れない状

態になり、避難すること

もできず、この地区では

出だったと分かりました。道

や田畑には泥が20センチも堆

積し、田圃にはぼろぼろのナ

イロンや藁や木材のごみが、

七夕の飾り付けをしたような

状態でいつぱい運び込まれて

いました。片付けるのにボラ

ンティアの方にも大勢来ても

らいました。毎日10人から20

人の方にお世話になり、3日

間で6つのハウスを片付けて



床の上まで浸

水した家が

9棟ありま

した。これ

からは温暖

化でこんな

ことはしょつ

ちゅう起こるようになると思っ

ています。洪水が家の前の道

路までで止まってくれればい

いですが、家まで来るかもしれ

れません。水害には子供の頃

から慣れっこですが、道路が

冠水し、家も浸水すれば逃げ

場はありません。今後は家庭

用のボートが、荷物を運ぶの

にも必要なのではと思ってい

ます。

これからの水害を考えた防災と心構えを



時以降に会社を出た人は、道路が冠水して帰るのが困難となりました。隣村の公民館へ避難した人や、車が浮いて流されるからと水に浸かりながら歩いて帰宅した人もいました。

ご主人 午後6時頃にはこの家の下の市道も5センチほど冠水し、徐々に増水が進みました。家の隣の市道の高台の所には避難した車の中でずっと待機している人もいたので、夜に炊き

出しのおにぎりを持って行きました。また、線路の下の府道にはすでに動けなくなった車がいくつかありました。

奥様 家の方は午後7時頃に停電となり、私たちの家は少し高い造りですが、離れの息子宅は低くて玄関先まで水が来しました。急いで畳を2階に上げて、荷物をテーブルの上などに片付けました。

ご主人 耕運機やトラクター

ご主人 午前中は雨がそれほど降っていませんでしたので、落花生の収穫をして車庫内に干して置きました。昼前に雨がひどくなり、作業をやめて家に引き上げました。風が非常に強く、これまで風が吹いても家に当たることがなかったのですが、山からのきつい吹き返しがまともに家に当たりました。

奥様 息子が午後4時頃に会社を出て帰ってきましたが、5

■舞鶴市・油江地区
もりぐち ゆたか

森口 寛 さん

もりぐち かずみ

森口 和美さん

ご夫妻

森口さんご夫婦は農家を営まれ、離れには長男家族が住んでいます。自宅の前を北近畿タンゴ鉄道が通り、その向こうの低地に、唯一の生活道路である府道が通っています。鉄道を越えて浸水したのは、昭和28年の台風13号以来のことでした。

も高台に避難させ、車庫の落花生をトラックの荷台に移しました。この時最も風がきつく、60年近く住んでいます、あんな強い北風は初めてでした。

奥様 午後9時頃に息子宅の

玄関が冠水し、結局、床上25センチまで上がりました。それから真つ暗闇の孤立状態で、水が引き出したのは午前3時半頃です。

ご主人 翌21日は、息子宅の



床下の水を下の水をポンプで排水して乾かし、また



つい流れを作り、大量のごみを隣村の蒲江へ押し流しました。この台風では北風の悪戯が大きかったのかもしれない。

息子の嫁の母親や友だちが来てくれて、風で横転した車庫の片付けをしてくれました。22日は行方不明の人を探すボランティアを頼まれて出たのです

奥様 由良川からはたくさん

のごみが田畑に流されました。大江町辺りからも流されてきて、みかん畑にはこんがらがるように大量のごみが絡まって溜まっています。

ご主人 あんなごみの量は見たこと無いです。由良川から来た水に、北風が上に向かってき

奥様 そうかと思えば田畑の土や野菜は何もかもが流されてしまつて、作物がすぐにできる状態ではありませんでした。こんな被害はもう二度とごめんだと思いました。

ご主人 これからは水の流れをよく考えた防災が必要です。常に長雨や台風の際は、冠水して交通が遮断されることを念頭におき、どうすべきかを準備しておくべきだと考えています。

「異常災害を通してこれからの防災を考える」
防災支部の皆さんの体験談

自治会の連携が、防災の大きな力になる



たかみや やすかず

高宮 泰一さん

〈当時〉 河守防災支部支部長

大江町会議員

〈現在〉 災害対策河守支部長

福知山市議会議員

当時、防災支部長を務めていた高宮さんは、常設の支部が閉じる11月2日まで、町の復旧復興に奔走しました。平成18年4月に福知山市に合併された今も、地域による防災の組織づくりに力を注いでいます。

ありませんでした。

その晩は支部に詰め、浸水し孤立した家の救助活動に懸命に当たりました。しかし、出動できる和船は1艘のみ。救助に向かうか否かで常に苦しい判断を迫られました。また、2名の行方不明者がいました。未明に自衛隊が人命救助に来ましたが、願いは通じず2名の方は犠牲になりました。非常に残念なことです。

その後は壊滅状態の町を復興させるために、

毎晩、自治会長と話し合い、対応に当たりました。防災支部の役割は、



た。その途中、大谷川が氾濫していたので、土嚢積みなどの復旧作業をして、事務所に着いたのは4時頃です。それから谷川のあちこちで起こる崖崩れなどの救援活動に多くを注ぎ、気がつくと周辺の浸水が始まっていました。午後7時過ぎ、由良川水位と低地住民へ避難を呼びかける役場の放送が入りましたが、あまりにも急激な増水で、低地はすでに浸水。手の施しようが

大江町は毎年のように水害が起こる町です。その教訓から旧村単位に6つの防災支部を立ち上げて、毎年6月に災害対策計画を立てていました。

自治会長、公民館長、消防団員、町会議員等で編成。地域で起こった災害は地域で対処する、各自治会が連携して動く大江町独自の組織です。

職員全員と全消防団員らを招集する3号動員が発令されたのは午後4時。私はその30分前に電話で連絡を受け、防災支部の事務所に向かいまし

自治会長を通して得た住民の要望等を取りまとめ、行政機関や業者と交渉し、具体的な解決策を講じることです。最初に大きな問題となったのは町中に堆積した泥と災害ごみの処理です。



を、連日、自治会長と協議しながらセンターに手配しました。炊き出しについては、作る人の苦労も考え、できるだけ公平な方法で当番制としました。すべてを通して心打たれたのは、自治会長をはじめとする支部員が、助け合いの精神でそれぞれの能力を発揮してくれたことです。大江町が復興できたのは、自治会と防災支部の強い連携があったからです。今後も各自治会が繋がりながら防災に取り組む組織づくりに努めたいと思います。

す。支部では町とかけ合い、業者に交渉し、処理してもらうことにしました。また、炊き出しやボランティアについても、いつでもどこにどのくらい必要か

毛細血管のごとく地域を知ることが最大の防災

さこ あけお

佐古明勇さん

〈当時〉 大江町消防団団長

佐古さんは大江町消防団9代目団長を務めました。大江町の歴史は水害との戦いの歴史であり、その中心に消防団があります。当時の消防団員は376名。被災後、消防庁長官褒状が贈られました。町には自分たちの町は自分たちで守るという意識が浸透しています。



大江町役場に設置された災害対策本部に待機したのが2時半頃でした。雨はひどくなる一方で、山間部のあちこちで鉄砲水や崖崩れが起こり、

団員に土嚢積みなどの命令を下すのに夕刻まで追われていました。そんな折に由良川が氾濫を始めました。福知山市の水位を見ながら警戒していたにもかかわらず突然の氾濫です。しかも、水足はこれまで経験したことのない早さです。それからは独居老人や孤立世帯の救助、避難誘導など人命

を第一に、2名の副団長と共に指令を出しました。現場の団員は各家に避難を呼びかけながら、被害状況を確認。避難所に来ていない人がいれば、

家まで確認に行きます。浸水した地区は和船に乗って巡視しました。また、町内には4つの水没橋がありますが、そこは主要道路に当たるので、団員が待機し通行止め等の整備に当たりました。

役場は午後6時過ぎに停電し、午



宅を見に行くと、介護ベッドの上体を起こして、顔だけ浸からずに寝ていたという人もい

後9時半過ぎに1階が浸水。本部の無線機や防災システムが不能となり、使えるのは消防無線だけになりました。その後

の後も夜を徹しての救助は続きます。停電した地区の住民の中には、「酸素吸入器のバッテリーが切れそうだ」と助けを求めてきた高齢者がいました。国道が冠水して病院には行けません。そこで投光器の発電機を代用するという処置をとりました。また、独居老人

ました。懸命の活動で30数名の住民を救助することができましたが、行方不明者が2名いました。未

明に自衛隊が人命救助にやってきましたが、大江町では2名の方が犠牲になりました。無念さは言葉になりません。21日から10日間は給水や清掃活動、二次災害の防止に務めました。災害対策本部がすべて閉められたのは翌年5月20日のことです。

教訓として思うのは、大江町ではこれまでの経験から荷物を上げて2階で待機するというのが習慣のようになって



いるのですが、それではだめだということです。高齢化が進み一人で荷物を運ぶのも大変です。最近の異常気象、異常災害、高齢化などから考え

ますと、まず自分の命を守るために避難所へ行くべきです。それからこれは常日頃から言っていることですが、防災は行政も全部ひっくるめての総力戦です。消防団の役割は、地域一人ひとりのことをよく知り、毛細血管のごとく動くことです。そのために日頃から人間関係を築いていなければならず、そうでなければ人命救助はできないと思います。

早め早めの行動で、自分の命を守る意識を



もりもと ひでゆき

森本 英之さん

〈当時〉 福知山市西中分団
副分団長

〈現在〉 福知山市西中分団
団長

台風時、森本さんは副分団長として救援・救助活動に当たっていました。浸水を経験したのは約30年ぶりで消防団員としては初めての経験でした。自宅は床上浸水しましたが、家に帰ることはなく明け方まで消防団の役目を務めました。



田地区の避難所が気

になり、分団長ら4

人で歩いて向かいま

した。陥落した道も

ありました。何と

か避難所まで行くことができ

被害状況の確認をし、こちら

の状況も伝えました。それか

らは朝までは詰め所で待機し

任務を終えてから帰宅しまし

た。自宅に戻ると、床上10セン

チまで浸水していて、おびた

だしい量の藁が流れこんでい

ました。どう処理したらいい

ものかと困惑するほどの量で

した。

水害にあったのは小学生以

来、約30年ぶりです。この地区

帰るとすぐに消防団の車で、

増水していることを告げて回

りました。その後、崖が崩れた

と通報が入り現地向かいま

した。すでに日は暮れていて、

風はそれほど強くはなかった

のですが、雨はかなりきつく降っ

ていました。土砂は民家まで

は来ていませんでしたが、地

盤は緩み崩れてもおかしくな

い状態でした。30人ほどで土

嚢を積む作業をしました。が、

足場は危うく、住民の方には

避難するように促しました。

たのでそこにも土

嚢を積みました。また、浸水し

た民家から救出の要請があり、

木でできた和船で向かいまし

たが、稲刈り後の藁がいつぱ

い流れてきて舵が取れません。

船から下りて腰まで水に浸か

りながら進みましたが、途中

で消防署の方にもお願いし、

私は案内役として同行し住民

を救出しました。

増水は午前2時頃におさま

り、水も引きかけました。はっ

きりした状況が分からない戸



では新しく家ができた密集地もあり、昔とは浸水する所も違ってきます。今の時代の環境を把握する必要があると思います。いずれにせよ災害時は早め早めに行動して、自分を守るが一番です。結果的に何もなかったとしても、避難袋を用意し、もしもの時を考えて行動することが大切です。

この地区では昔は浸水の恐れがあり、台風のたびに心配していました。ここ最近では浸水がなく安心して過ごしていました。19日の晩もそれほど心配はしていませんでした。ただ20日の朝は雨が急に強くなったので、「警戒しなければならぬかな」と思いながら仕事に出かけました。消防団から連絡が入ったのは2時半頃です。それから車で、タイヤ半分が浸かるぐらい冠水した道を通って戻りました。

次の災害時は、より強化した自主防災を



桐村 茂樹さん
きりむら しげき

〈当時〉 福知山市下川分団
副分団長
〈現在〉 福知山市下川分団
団長

堤防ができるまでは、桐村さんの地域（波江）は台風が来るたびに浸水していました。100ミリの雨が降るとすぐに田畑が浸水してしまったほどの低地です。しかし、台風23号での被害は地区の中でも最小限のものでした。

め所に避難してもらい、ラーメンなどの夜食を出しました。私は1時間おきに歩ける地域を見回りました。

庫や保育園の片付けなどに当たりました。

50年に1度の水害は消防団

としてなすすべがなかったというのが本音です。しかし、団員がケガもせず一生懸命やつてくれたことはありがたかったです。情報収集や団員の把握、地域独自の防

災のあり方などを考えるいい経験となりました。異常気象でいつまたこんな水害があるかもしれない。その時はこの経験を活かし対処したいと思っています。



翌朝、午前4時頃には水が引き、夜が明けると泥沼化した町が姿を現しました。地区全体の約7割が浸水。断水もしています。30センチほど堆積した泥をどうするかが最初の問題でした。団員はそのまま夕方まで待機し、格納

朝から雨はきつかったのですが、通常どおり出勤しました。ところが、電車が信号機か何かの故障のため綾部付近で止まり、再開の見込みがたたないとアナウンスが入りました。ちょうど折り返しの電車があったので、会社に休むと連絡を入れて帰宅しました。午後からはあまりに雨がきついたので、独断で地域の見回りに出ました。案の定、鉄砲水になりかけの所があり、消防団に出動要請



をかけた、土嚢を積みました。それから午後5時頃まであちこちで対応に追われました。ひと段落したので詰め所で待機していたのですが、ふと外を見ると、道路にゴミと水が流れています。驚いてすぐに消防団の車を避難させました。水は初めてです。詰

め所は何もできぬまま浸水しました。20数年消防団をやっているこんな水は初めてです。国道から

牧川を見ると物凄い増水です。堤防が決壊したらうちの地域は全滅だと思いました。身の危険を感じ、家族と隣の一人暮らしのおじいさんを、高台の自治会長さんの家に避難させました。

その後は道路が寸断され、消防団としての動きはほとんど取れませんでした。詰め所が浸水したので別の詰め所になりましたが、ちょうどその前

が国道9号線の分岐点、舞鶴方面に向かう大型トラックがひっきりなしに通る所です。暴風雨の中、団員は一晚中交通整理に当たりました。帰路を断たれたドライバーには詰

「災害ボランティアは被災者の力と勇気」

ボランティアに携わった皆さんの体験談

初めての水害ボランティアセンターを開設

うめはら ひとし

梅原均さん

〈当時〉大江町社会福祉協議会
事務局長

梅原さんは、大江町で初めて水害ボランティアセンターを立ち上げた立役者の一人です。ライフラインが寸断され壊滅状態となった被災地で、被災住民とボランティアの架け橋となり、町と人の一日も早い復興に努めました。



一番の痛手は大江町役場が浸水し、行政機関が麻痺してしまったことです。交通も通信も断たれ、町も行政も住民もパニック状態でした。私自身も被災しており、大江町社会福祉協議会事務所のある会館が浸水していることも知りませんでした。

それでも何とかしないといけない、そんな思いで、京都府と京都府社会福祉協議会、中丹西保健所と協力し、22日午後3時、水害ボランティアセンターを立ち上げました。大江町にとつ

ては初めての経験です。府内外の社協スタッフに支えられ、試行錯誤しながらのスタートでした。

23日、泥だらけの北近畿タンゴ鉄道大江駅裏の駐車場を清掃して、2つのテントを張り、午前8時に現地センターを設営。駅周辺は低湿地帯の被災地であり、ここなら現場へ行きやすいだろうと設けました。初日のボランティアは93名、土・日は400名を超え、2週間で延べ2718名のボランティアが

町内外から駆けつけてくださいました。

毎晩ミーティングを行い、翌日に備えました。苦労はいろいろありましたが、とくに心配したのが地元のことです。小さな田舎町のこと、よそから来るボランティアを受け入れるのは初めてです。「お金はいるのか」「ご飯は出すのか」などの質問が飛び交いました。ボランティア



アは手弁当に水筒を持参し、無報酬で手伝ってくれることを、チラ

シを作り周知しました。

また、当初は各戸に設置された有線放送が使えず、住民のニーズを喚起することが困難でした。そこで地域と直結した6つの災害対策



地への案内は町内ボランティアの協力を得て速やかに行いました。

「ゆつくりしていよ」「もつとすることない？」ボランティアからかけられるちよつとした言葉に、被災者は心が和み、勇気づけられます。感謝の言葉もいっぱい寄せられました。災害から一日も早い復興をするため多くのボランティアの皆さんに来ていただいたことに心から感謝を申し上げます。災害はいつどこで発生するか分かりません。いざという時のボランティア活動が一層広がってくれればと願っています。

支部に電話をし、ボランティアの活動をお願いしました。災害対策支部では毎晩ボランティアのニーズを取りまとめ、翌朝センター本部に連絡。現地センターではそのニーズを模造紙に書いて張り出し調整をはかりました。一番気をつかったのは、来てもらったボランティアを待たさずに現地へ行ってもらえるようにすることです。現

多くのことを学んだ子供たちに心打たれて

もりもと さとる

森本 悟さん

大江中学校校長

台風二十三号災害記録文集
編集委員副委員長

森本先生は大江中学校に赴任して1年目に台風23号に見舞われました。被災したたくさんの生徒たちを見守ってきましたが、台風23号が自分にとって何だったのか見つめ直す機会になるようにと「台風二十三号災害記録文集」の編集にも携わりました。



大江町の通学路には沈下橋があつて、それが雨で不通になり休校になることがたびたびあります。生徒たちはそれに慣れていて、20日も昼から下校できて「ラッキー」と思ったようです。しかし、下校しながらいつもと違う雨を感じていたようです。

早い給食を食べさせて生徒たちを帰した後、被害が心配な教職員もいるので、3時に帰宅してもらいました。大江町教育

委員会からは大江中学校は避難場所になるから教師1名が残るようにと言われました。私は赴任1年目で学校の設備等に精通していないので、教頭が残ることになりました。午後5時過ぎ学校を出て一旦帰宅。学校が気になるもので、教頭に再登校すると連絡を入れましたが、すでに周囲の道が冠水して学校は孤立状態でした。

私は教職員に安否確認の連絡を入れ、教頭には状況を逐一

連絡しました。翌朝は朝5時に、妻が用意してくれたおにぎりどゆで卵を持ち、車で学校へ向かいました。しかし、どこも通行止め。綾部の自宅から福知山を回って学校に着いたのは午前10時半頃でした。その日は、登校してきた教師5名と教頭とで手分けして、被害にあつた生徒を家庭訪問しました。

学校を再開したのは25日からです。ほとんどの生徒が登校しました。全校集会でまず伝え

たことは、被害にあつた生徒もそうでない生徒も同じ気持ちでこ



の水害を受け止めようということでした。そして、これは歴史的な水害であることを伝えました。大江町は50年おきに水害にあい、見事に復興してきました。そういう捕らえ方をすることが、これからの復旧に大きく役立ち、次にまた起こった時に自分たちがどうするかにつながっていきます。生徒たちには出来ることをしようと言いました。それが地域の

中の学校の役割であり、出来ることをするということ、行為が、教育そのものだからです。

生徒は自主的

に出来る

ことをし

ました。教

師の引率

で手伝い

に出たり、

町のボラ

ンティアに

参加したり、

友人や近所

の家を手伝

いに回った

り。生徒会

では通学路

の掃除を

率先して行

いました。作

文で「協力

する大切さ、

助けられた

時のうれし



さを知ったと書いた生徒がいます。台風23号はとても不幸な出来事でしたが、生徒たちは非常に多くのことを学びました。その子供たちの姿に心打たれました。

命のための食料と水を、2日分用意する心がけを

あさおかつじ

浅尾 勝次さん

(社)福知山市社会福祉協議会
会長

浅尾さんは社会福祉協議会会長として被災者の対応に追われるかたわら、個人でボランティアを要請し、被害の大きかった蓼原地区に派遣しました。駆けつけたボランティアの方にはご自宅を宿泊所として提供し、一日も早く復旧できるように力を尽くしました。



しました。

20日は出張で京都に行っていました。夕方5時半頃、車で自宅へ戻ってきました。その途中で河川を見ると、今まで見たことのないような荒々しい状況です。これは危ないと思い、すぐに公民館に避難所を設置しました。しかし、その時はもう手遅れ。誰も来ません。暴風雨で家から外に出られる状況ではなかったのです。台風の真っ只中に避難するのは困難であることを痛感

翌21日の朝は、最も被害が大きかった蓼原地区に、とにかく食べ物が必要だろうと思い、食料を持って車で向かいました。しかし、道路の寸断や渋滞で行くことが出来ずに断念。道には泥が膝まで堆積していて歩けやしません。それでも22日の朝には、京都で菓子パンを300個ほど手配し地区の人に配りました。昼はカレーを100食ほど作り持って行きま

した。被災地では停電や断水でご飯が作れません。空腹では何をする気力も湧きませんから、こういう時の食事は本当に大切です。

23日には京阪神から寝袋持参のボランティアが15人ほど駆けつけてくれました。私の自宅で合宿しても



力が最大限に活かせるように調整しました。個人では出来ないことをやってくれる災害ボランティアは、今後の災害時にはより大きな存在になっていくでしょう。

くれます。その姿に被災者は勇気づけられます。また、大江町の水害ボランティアセンターへも30人から70人のベテランのボランティアを2日間派遣しました。いつがいいか、どんな道具が必要かなどセンターと相談して、ボランティアの



台風23号では多くのことを経験しましたが、災害時に一番大事なことは自分の命を守ることです。無駄になってもいいから早いうちに避難すること。そして、その命を守るための2日分の食料と飲料水を用意すること。そういう常日ごろの心がけが大切だと思います。

「災害に強い新しい体制づくりを」

行政の皆さんの体験談

浸水後、どういう執務体制をとるかが大切



つばうち しげき
坪内 茂樹さん

〈当時〉 大江町建設課課長
〈現在〉 福知山市都市整備部
都市整備課参事

当時、大江町建設課長であった坪内さんは、台風時には司令塔となり、土砂崩れや鉄砲水などから生活道路の安全を確保するという任務に当たりました。一夜明けてからは、河川、道路に加えて水道、下水道の復旧にも懸命に対処しました。

今でも台風23号の水害は現実起こったことなのかという思いがしています。ことが動いたのは午後4時頃でした。庁舎の後ろにある北近畿タンゴ鉄道のガード下に水が溜まり、そこに車が突っ込んで立ち往生しているとの通報が入りました。直ちに現場に向かい救出と通行止めを行いました。以後は災害通報があちこちから入り、その対応に追われました。午後7時頃、波美水位観測所の水位が9.39メートルとなり、これは暫定堤防を越水すると判断し、激

しい風雨の中、線路上上がり暫定堤防をのぞいて見ましたが確認はできません。引き返す途中、集水桝から水があふれ排水管を逆流しているのを発見。低地部の道路は冠水を始めています。人影も無く、誰もこの事態に気づいてないのではと思い本部に連絡を入れ、有線放送で住民に知らせてもらいました。すっかり停電した庁舎の1階が浸水し始めたのは午後8時半頃です。懐中電灯を頼りに台帳、機器関係を腰まで泥水につかりながら2階へ移動。その

間、ガラス張りのドア越しに泥水のかさが高くなるのが見え、とても不気味でした。さらに隣接の施設のガラスが割れて一気に水が流れ込むと、いよいよ危ないということで全員2階へ避難し、寒く長い夜を過ごしました。

翌朝、町は悪夢のようになりひどいありさまです。ただちに緊急幹部会が開かれ、対策の分担を決め、任務に当たりました。住民窓口は仮事務所を2階に設置し、翌22日より受け付けを再開しました。

建設課は道路、河川、上下水道が担当分野です。まず生活道



路、水道、下水道を復旧しなければなりません。中でも水道が最も大変でした。住民は堆積した泥を水で流したいと思っています。普段より多くの水が必要ですが、水量には限りがあります。農業用ポンプも使用しながら節水に協力してもらい、被害の大きい低地に優先して送水しました。飲料水の断水対策として自衛隊等の給水車に1週間以上支援してもらいました。

庁舎が浸水し、行政が麻痺したことは非常に辛いことでした。住民にも迷惑をかけてしまいました。災害後の対応と

して、自家発電機や防災無線等の重要機器は高所や2階に設置し、地区単位に水位と地盤高の関係を表示したハザードマップを作成し配布しました。行政視察等でのアドバイスとしては、堤防は決壊することがあり得るということです。近くの河川の計画高水位(堤防設計水位)を確認し、庁舎内の重要機器は計画高水位以上に配置し、浸水後の執務体制を確認しておくことが大切



台風23号の教訓を、これから防災に活かしたい



とか割り振りました。職員は一刻も早く避難所へ向かうのですが、道路が冠水してなかなか行けない箇所もありました。「行

福知山市は朝から激しい雨が降り続いていましたが、午後4時に災害対策本部が置かれ、その約10分後に市の3地区に避難勧告が出されました。午後5時55分には由良川危険水位5メートルを突破し、旧市街地の43自治会に一斉に避難勧告が出て、28箇所避難所を開設しました。避難指示、勧告による避難所には1箇所2名の職員を配置することとしたのですが、福祉部の職員だけでは足らず、保育園の園長や他の部署の応援を得て何

ける所まで行くように」と指示し、水に浸かりながら行つた職員もいます。今思えば危険な指示をしたと思いますが、「何としても早く」という気持ちからでした。所によつてはすでに住民が集まり始めて、「遅い」とお叱りも受けましたが、当時の状況では時間的に精一杯でした。

こにしけんじ
小西 健司さん

〈当時〉 福知山市福祉部部長
〈現在〉 (社)福知山市
社会福祉協議会
常務理事

台風当時、小西さんは福知山市役所福祉部に詰め、避難所の開設から職員の配置、避難住民の安否確認、毛布や食料の配布とさまざまな対応に追われました。現在は福知山市社会福祉協議会で災害ボランティアネットワークの構築に力を注いでいます。

います。

当時、福祉部は住民避難、生活物資の供給、災害救助法にかかる任務などを担当し、多忙を極めました。職員の頑張りは素晴らしかったと思います。避難所の運営方法、毛布や食料の備蓄と配布、避難所への情報提供のあり方など、もう少し細かな防災マニュアルの必要性を痛感しました。

今、私のいる社会福祉協議



会では「災害ボランティアネットワーク連絡会」を立ち上げ、災害時にスピーディーに支援活動ができるようにと、個人ボランティアは



もとより団体、看護師や重機の操作ができる有資格者、さらには軽トラックや

電動ノコギリといった物品まで幅広く登録を呼びかけています。これは住民同士で助け合うネットワークです。ある避難所の自治会長さんが「保健師が避難所に来てくれて、本当に心強く思った」と言われました。その姿を思いお越しながら、台風23号の体験を少しでも生かすことが出来ればと思います。

教訓を忘れず災害に強い道路を



動範囲が4、5キロとなりました。その後は電話で地元業者に状況連絡をもらい、通行止めや看板を立てるなどの指示を出しました。バスが

水没した由良川筋の情報は午後6時までは入っていた

20日の昼過ぎから雨がひどくなり、方々から崖崩れなどの通報が入りました。今日は大変なことになるぞと思い、午後4時前に、東舞鶴の事務所の職員の増員を図り、所内の職員にもできるだけ残るように通達し、全員体制で警戒に当たりました。個々の情報を図面に記し、崩土・浸水・通行止め・その他に整理し、道路状況の把握に努めながら現場の対応に当たりました。しかし、午後7時頃、事務所周辺の道路がほぼ通行止めとなり、可

のですが、その後なかなか入ってこず、浸水して電話できない状況であったことが後で分かりました。今から思えばサイレンを鳴らしてでも見に行かせたらよかつたと思うのですが、その時は通行止めにした箇所が50以上あり、現場の処理で手一杯で、全体が掌握しきれなかったところ。というのが正直なところ。この台風23号を機に新しいマニュアル作りをしてい



るのは大変な人もいます。しかし、今回の問題はそこにあつたのではと考え、浸水した時を想定し、

すみだ としあき
住田 敏明さん
京都府中丹東土木事務所
所長

ます。情報収集においては、これまで地元から通報してもらっていましたが、それを改め、定期的に連絡する人を確保して、こちらから連絡をするようにしました。また、去年、国道175号線を舞鶴から福知山まで通行止めにする訓練をしました。国道175号線は24時間で約18000台通行する幹線道路です。日本海側からの大型車も頻繁に通り、これを止め

台風23号は各地で土砂災害を起こし、濁流で道路を呑み込み、幹線道路から生活道路に至るまで道路を寸断しました。中丹東管内で通行止めになったのは50力以上。陣頭指揮に当たった住田さんは当時の教訓を忘れず災害に強い道路管理に取り組んでいます。

国道175号線に入ってくる道路もすべて止め、



無人の遮断機も設置しました。2年半前の教訓をずっと持ち続けたい、そのためには現地に立って実際にやるのが一番であると考え、この訓練を年に1回必ずやり続けるつもりです。そしてもう一つ、今、試験的に行っていることがあります。道路と川と土砂崩れといった状況を一つの画面で、共有して見られるソフトの構築です。パ

ソコンの画面上の地図に、被害場所を示し、クリックすると詳細も分かるというものです。行政機関のどこでも見られるように作っています。将来的には一般の方にも見られるようにし、情報収集も図りたいと思っています。

台風23号では道路の復旧に時間がかかり、各方面にかなりの影響が出ました。今後の道路管理の指針としましては、個々の幹線道路をより強化し、半日ぐらいで復旧できるようにしたいと思っています。また、災害時の代替道路の必要性を痛感し、今、そのための整備にも取り組んでいます。

危機管理の大切さ、臨機な対応の難しさ実感



足立 庄治さん

あだち しょうじ

京都府大野ダム管理事務所
管理課長

大野ダムに赴任して2年目に足立さんは台風23号に見舞われました。2回の雨のピーク、水没バスへの配慮など、操作判断の難しい状況の中、ダム管理に最善を尽くされました。大野ダムはダム・堰危機管理業務顕彰委員会より「平成16年度優秀賞」を受けました。

に達したので、流入量の58%を放流する洪水調節を開始しました。その後雨は激しく降り続きましたが、午後7時頃から雨脚が急速に弱まり、事務所に詰めていた職員全員がほっとしました。ところが、その2時間後、再び雨が強く降り始めました。美山時雨といつて、台風通過後も雨が残るこの地方特有の現象です。午後10時には、4時間後に洪水時のダムの最高水位、サーチャージ水位を超える計算結果が出ました。サーチャージ水位を超えるとダムの貯水機能はマヒしてしまいます。流入してきた水を貯留せずにそのまま流す「ただし書き操作」へ移行すべきか検討をしました。しかし、京都府災害対策本部では、舞鶴市内で冠水した

平成16年は大野ダムにとって自然災害という「災」の年で

した。1月は雪による長期停電に見舞われ、8月には雷によるダム管理設備の被害がありました。そして、落雷により被災した設備を応急復旧している状態で、台風23号を迎えることになりました。

20日は午前8時頃に大雨警報が発令され、午前11時頃から雨が強まり、午後5時には流域平均時間雨量が20ミリを超えました。午後5時31分にはダムへの流入量が500m³/s

国道175号線で、37名が乗車しているバスが立ち往生して危険な状態にあることから、洪水調節の操作を継続し、サーチャージ水位まで貯水することを決定しました。その後



台風23号では大野ダムも被害を受けました。上流から5600m³の樹木

等をダム湖に運び込まれました。流木止めで捕捉し、下流への流出を防ぎましたが、流木を除去しチップ化するのに膨大な費用を要しました。

平成16年に起こった自然災害に対処する中で、危機管理の大切さ、臨機の対応の難しさ

さを実感しました。洪水調節については評価を受け、多くの人にダムの洪水調節についてご理解いただきました。しかし、大野ダムの流域面積は由良川全流域面積の18.8%に過ぎないということもご理解いただき、各自防災に努めて欲しいと思っています。今後とも台風23号の教訓をしっかりと活かし、適切なダム管理が行えるよう一層の努力をしていきます。



「子供たちが水害から学んだこと」

「台風二十三号災害記録文集」より

「台風23号の記録」

〈当時〉大江中学校一年

かどの ひろし
角野 大志

十月二十日に台風23号が接近していました。大雨洪水注意報が出たり、解除されたりするのを気にして、結局学校に行きました。行ってみると、授業中も風や雨がすごい勢いで降っていました。それで何時頃から忘れたけど、大島先生が、「今、警報が出ました。すぐに下校することになりました。」と言われて、喜んでかえりました。

帰り道は、痛いほどの強い雨や逆風で後にバツクしうになりました。川の水も早いうちからゲンゲン増えていました。ぼくは正直、「家まで水が来ん程度に水がついたら、おもしろいなあ」と思っていました。

家に帰ると、おじいちゃんやお兄ちゃんが、「今回ののは絶対家までつく」と言っ

ていました。そのとき、水害の経験が何回もあるおじいちゃんが言ったんやから、初めて不安になりました。

その後、見に行くと、高津江に昔から言われ継がれている「そこがあふれると必ず洪水になる」という溝がすでにあふれていたの、それを見たときにお父さんが家の後かたづけをすることを決めました。

その後、お父さんがちよつとひどいケガをして病院に行くことになって、ぼくもつきそいで行きました。やっとの思いで帰ったときには、道のすぐそこまで川水が増えていました。それで家に帰るとおじいちゃんとお兄ちゃん、親せきの家が土砂くずれで大変やつたらしくてそこへ行き、家に残っていたの

はお母さんとお姉ちゃんだけでした。

でも、どんどん早い勢いで増えていくのを見て、おじいちゃん達も帰ってきました。それでやつと皆そろって片づけができると思つたのに停電になってしまい、暗い中で作業は難しくてそのうえ、みるみるうちに水が道に、そして、家へと入ってきました。仕事場の原料は、車に積んで高いところへ避難させたけど、主な機械類はどうしようもなくあきらめました。

次に、部屋を片づけようとすると、もう手遅れで畳はすでに浮き始めていました。水はどんどん増えていき、歩くのが精一杯で荷物を二階へあげられる状態ではありませんでした。しかも水はどんどん増えて腰まで増えていました。もうあきらめることにしました。ぼくはみじめで、悲しくて思わず泣いてしまいました。あの何とも言えない気持ちは忘れられません。

それで一階では、いられないほど水が増えて、二階にいました。けれども、早くでないと家から出られなくなるの、とにかく子どもと犬だけで近所の高い家に避難させてもらいました。それでも、その家まで水がついてきてしまったので、お父さん達も家の方はあきらめて逃げてきました。それで家族みんな腰までつかりながら、もうひとつ高い家まで避難させてもらいました。

避難の途中、水につかった体は冷え切っていてガタガタと体の震えが止まりませんでした。真っ暗で寒くて悲しくて不安な一夜を家族みんなで過ごしました。体はどうしても温まりませんでした。次の日、お父さんがまだ暗いうちから家を確かめに行つて二階ぎりぎりで行つて二階ぎりぎりで助かったと言ふことを知らせてくれました。二階がつくの、つかないのでは、大きな違いなのでほんとうにホッとしたし、

うれしかったです。

ぼくもいつもより早く起きて家を見にいつて家の中の様子を見に行こうとしたが、どんなになつてるか想像するだけでも怖くて勇気がいりました。お父さん、お母さん、おじいちゃんは早くから起きて、上の方の壁から順番に洗つていつてくれました。家の中は、家具はめちゃくちゃで泥だらけになっていました。ほんとうに途方にくれる状態になつていました。

ショックを受けていると近所のおばちゃんがおにぎりを持ってきてくれました。とてもおいしくて忘れられ



ない味でした。

そのあとお父さんが落ち込んでいた。ぼくたちに「困っているのはうちだけじゃない」ということを見せるために、河守の方へ連れて行ってくれました。ほんとうにすごい光景を見て、どこも大変で、ぼくたちも頑張ろうと勇気がわいてきました。そのあと地域の人や親せき関係の人が水や食べ物を持って手伝いに来てくれて、おかげで早く復興することができました。ほんとうに人の温かみも感じることもできました。電気がなかなかつかなくて、長い間一部屋にかたまつて口ウソクで過ごしたり、何日も外でご飯を食べたことはいつまでも忘れない思い出になると思います。

今回の台風ではいろんなたくさんの人に助けてもらったので、それを覚えておいてそのときのうれしかった思いを今度はぼくが返したいと思います。



「台風23号で感じたこと」

〈当時〉 大江中学校三年

もりした あさみ
森下 あさ美

十月に起こった台風23号で、私の家は床上5センチほど水につき、両親の車も水没するという被害を受けました。また、私の祖父母の家も大きな被害を受けました。いつも明るい祖母が、ショックで口数が少なかったのが印象に残っています。

台風が去りシーンとした町を見回してみると、どこの家もグチャグチャに壊れていました。そんな中、私の家に親戚などの沢山の人が来て、復旧作業を手伝ってくれました。片づけても、片づけても終わらない作業を続けるのは私自身とても苦しくつらかったです。でも、私の何倍も両親、祖父母の負担は大きかったと思います。それを気づかって周りの皆さんは力を合わせて作業をしておられました。その時、

私は人としてのつながりを強く感じました。このように大

人の方だけでなく、私は友達にも助けられました。ある子は「つらい時やと思うし手伝いにいくわ。」と言って家まで来てくれました。またある子は、「手伝うことありませんか？」と家を訪ねて来てくれました。その子たちとは、学校ではなかなか話す機会がないのですが、家まで来てくれる人がいる、そばに居てくれる人がいる、ということがはとても大切だと言うことがよくわかりました。

この台風により、大江町全体が大きな被害を受けました。しかし、私が感じたように人と人とのつながりや、そばにいてくれる人の大切さというのを、少しでもみんなが感じ

ることができたならば、それがこの台風23号が残したたった一つだけのよいものだったんじゃないかと思います。これから生活していく上での大切なものを感じることができました。

私は、家までかけつけて来てくれた友だちの優しさを忘れません。そして、あの子の悲しそうな祖母の顔を忘れません。この台風23号は、私にとって大江町のみんなにとって数々の忘れてはいけないものを残したものだと思います。

「台風23号を体験して」

〈当時〉 大江中学校三年

しんじともえ
新治知恵

私は実際にこんな大きな台風を体験して、初めは自分の家が2メートル40センチも浸水するなんて、思ってもいませんでした。

昔から大江町は水害がひどく、台風が来るたびに家が浸水したりするとは聞いていましたが、それは他人事で自分の家は、私が生まれてから一度も浸水していませんでした。安心していました。ましてや、家に水が入ってくるなんて想像もつかないかったです。

十月二十日、私は普投と同じように家でぼんやりとテレビをみていました。外はすごい雨で増水。時々停電したりしていました。でも、私は全く「怖い」とか、「大変だ」とか思いませんでした。台風が来ると、いつもこうなるからです。恐怖というより「明日学校休み

になるかも。ラッキー」と思っていました。

しかし、いつもなら止む雨は止まず、川も増水する一方。とうとう、電気も全くつかなくなりしました。いつものように家族全員、懐中電灯を持って移動しました。家の外に出ると、家の前の川の水が、もう少しで道路に溢れそうになるまで水が増えていました。それでも私は、全く恐怖とかは感じていませんでした。お兄ちゃんもそうでした。「すっげえ」とか、「どこまで増えるかな」とか、恐怖というよりワクワクでした。

でも、家の中に入ると、お父さんが怖い顔で「このままでは家の中に水が入るかもしれないから、1階の大事な物をできるだけたくさん2階に持っていく上がれ」と言ってきました。

ここで初めて、私はこの重大さに気づきました。

みんなで物を運んでいる途中、いきなりガラスが「パリーン」と割れる音がして、同時に茶色い水が一気に家の中に入ってきました。私が乗っていた畳も浮いてきて、物はいいからとりあえず全員2階に避難することになりました。電気はつかないし、外にも出られない。水が増えるにつれて、不安も大きくなっていききました。

役場の放送も、途中で途絶えてしまいました。この時すぐく役に立ったのが携帯電話です。ライトのかわりにもなるし、何よりも連絡が取り合えたからです。大阪・京都にいるお兄ちゃん。それに親戚とも話すことができました。とりあえず、このままじっとしていてもどうしようもないし疲れる、ということ、これからに備えて寝ることにしました。私は普通に寝たけど、お父さんとお母さんは心配で寝られなかったそうです。

朝起きてみると、だいぶん水が減っていました。けれども、1階に降りられる状態ではありませんでした。また、階段の半分くらいまで水があったからです。でも、水が減るのは速かったです。1階の所まで水が引いたので、1階に降りてみると、泥が30センチくらいたまっていました。

家の中もすごかったけど、もっと驚いたのは外の光景です。川にはゴミや木がたくさんあって、ほとんど水は流れず止まっている状態でした。逆に道路には水が流れていました。それに臭いもすごかったです。泥の臭いとかガソリンみたいな臭いもしていました。

一番困ったのは、水が使えなかったことです。飲み物は缶ジュースとかがあったから大丈夫だったけど、家中の泥を外に出すには水が必要。たし、何よりもお風呂にいけないことが一番辛かったです。道路が使えるようになると、毎晩福知山温泉に行きました。

隣の家のお風呂を借りたことも何回ありました。本当にこういう時にこそ協力し、助け合うことがすごく大切だと思いました。

復旧作業にも学校とかいろんな所から手伝いに来てくれました。友達が来てくれたときは本当にうれしかったです。話ができてすごく安心しました。台風は怖かったし、被害も車、機械、家と大きかったけど、人の優しさにたくさんふれることができました。

今では、そのおかげで家もだいぶ直ってきて、店も再開することができました。台風23号では、多くの人が亡くなったり、ケガをしたりしました。こんな台風は二度と来ないでほしいです。それにもし、次に来て、大丈夫なように何か対策を考えなければいけないなと思いました。

台風23号

〈当時〉美鈴小学校五年

かじわらしょう
梶原将

十月二十日、ぼくは学校に行つたけど、二時間目で学校が終わり、家に帰ることになりました。

帰ってからすぐに宿題をしました。台風が来たら、宿題ができなくなると思ったのでゲームより先にすることにしました。

夜になって、風と雨がすごくなつて、トタンが飛んで玄関に当たりました。トタンぐらいいで良かったと思いました。ばんご飯の時間になったけど、おじいちゃんの帰りが遅いので、おばあちゃん心配して、ばんご飯どころではありませんでした。

風も雨もはげしくなつて、停電で真っ暗になりました。おばあちゃん一人暮らしをしている友達の家に出かけました。そしたら、そこにはおじ

いちゃんがいて、たたみを上げたりするのを手伝っていました。

十五分位すると、明匡君のお父さんが

「橋が水につかりそうなので公会堂へ避難して下さい」

と言いに来られたので公会堂へ向かいました。公会堂に着くと、おばあちゃんたちがおにぎりを握ってくれたので、それを食べました。その時、お母さんは仕事から帰れなくなっていて、どうしているのかと

思い、とても不安でした。だけどがくよう君と遊んでいると安心できて、いっしょにねてしまいました。

ふと、おじいちゃんに起こされて
「台風がおさまったから家に帰るで」

といってつれて帰ってもらい

ました。

家の中は真っ暗でろうそく一本の明かりでした。その日はみんな固まってねました。

朝おきて、家の前の川を見ると水があふれていて、田んぼもぐちゃぐちゃになっていました。ひとばんでこんなふうにして、台風はこわいと思つたし、もう二度と来てほしくないと思いました。

夕方、お母さんが帰ってきました。くれてうれしかったです。



台風23号がやってきて

〈当時〉美河小学校六年

いわたけんじ
岩田健児

十月二十日、学校が早く終わって家に帰りました。家に帰ると雨もりがしていました。お父さんがとつぜん帰ってきました。「床上三十センチぐらい水がつくから、物を上に上げるぞ。」と言つたので、物を上げました。

そして、六時ごろ、いきおいよく水が入ってきました。ぼくはすぐくドキドキしてこわかったです。冷蔵庫の倒れる音が聞こえました。三階にひなんしたけど、壁からドンドンとすごい音がなりひびいていました。すぐこわかったです。

三階から二階に下りようとすると一階から二階への階段がもう見えなくなっていました。二階の窓から外を見ると、目の前は水しか見えませんでした。そしたら、となりのおばあちゃんが船でぼくの家にひなんして来ました。

次の日、水がなくなったらどろ落としをしました。それが毎日のように続けました。とてもえらかったです。おにぎりが一日三個でとても苦しかったけど、友達から食べ物をもらったりして、すごうれしかったです。その他にも飲み物やマクドナルドとかいろいろもらいました。

その後、電気屋さんが来て電気がつきました。どろもけつこうとれて、あとはホースを使って水でどろを外に出しました。家がちゃんと直るまで一か月半ぐらいかかりました。

お世話になった人達に、もう一度ありがと言いたいです。

もうこんなすごい台風は絶対にはやだなあと思いました。

〈当時〉有仁小学校六年

はやしのぞみ

林望美

十月二十日のことは忘れられ

ません。午前十時ごろに警報が出て、昼ごろに家に帰りました。台風23号が近づき、近畿地方が危ないということでした。(本当を言うと早く帰れていいと思っていました。)

帰るときは、風も強くなかったし、雨も降っていなかった。自分で歩いている場所が水にかかるとは予想できませんでした。

家に帰ると一人だったから、のんびりしていました。その後お姉ちゃんもお母さんも帰ってきました。そしてちよつと遅れて、お父さんも帰ってきました。いつもより強い雨と風でした。ちよつと窓や戸がガタガタいって、その時は不安になりました。私はお母さんの言った言葉、「この道もつかってしまおう。」

が信じられませんでした。

家の横は土が上げられています。うちの家となりの家の間に土の坂があり、そこから大量の水が流れ出ていて、車庫の前が水びたしになっていました。私はその光景を見て、おどろきました。

テレビを見ていると停電になり、ろうそくをつけました。電気がついたり消えたりして、ずつとかい中電灯とろうそくをそばに置いておきました。ろうそく五本ぐらいでみんなの顔はあまり見えませんでした。もう家の前の道はつかっていません。

停電だからテレビも見られないので、放送だけが頼りでした。うちの前には階段と坂があり、だんだん坂が水で見えなくなり、階段も一段一段ゆっくりと見えなくなっていきました。

した。一段ずつ見えなくなるごとに私の心臓がドクン、ドクンと大きな音を立てていきましました。そしてお母さんに「もう見るな。」

と言われました。

でも私は、言われたことを無視して見に行くと、もう階段がありませんでした。それは信じられない光景で、いつもはポツポツ明かりがあるのに、真つ暗でした。台所も水につかってしまい、ずつと「止まって、雨やんで。」と願ひ続けました。

「二階がしん水するかもしれないで。」

と言われ、一階のものは全部上げて、

「二階がつかつたら山ににげる。」と言われて、その服装などの準備をしました。

午後の九時を回っても雨はやまず、時間だけが過ぎていつて、お父さんに、

「やばくなつたら起こすから。」と言われて、寝させられました。そんなことを言われてもこわ

いからなかなか寝られませんでした。午前一時ごろに水が減ってきて、

「増えることはない。」

と言われて、お父さんは寝に行きました。見てみるとげん関の戸が取れて、水の上にかんていました。

朝の六時ぐらいに起きて、ねむつたのはあわせて七時間ぐらいでした。

道のはしつこに何かがあつて、あんなものは昨日までなくて、何だろうと思つていました。水が引いてきたら、それは車だと分かりました。

私の家の裏には大きな木があつて、それも流れていつてしまいました。水にうくのは当たり前だけど、家に当たらずにいつてしまったみたいで、とても不思議でした。家は床上しん水だから、うまいこと当たらずにいつたんだと思います。

本当にこわかつたけど、すごく貴重な経験をしたと思います。でもそうじが大変でした。